

ふるさと見て歩き

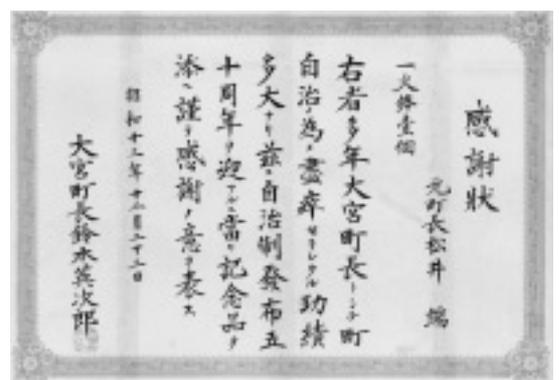
第67回

大宮町二代目町長
松井端(上)

昨年、大宮町二代目町長・松井端の孫にあたる松井暢夫さんから、端の大宮町長時代の遺品（功勞についての感謝状と副賞の火鉢）を寄贈していただきました。



▲大宮町から贈られた火鉢



▲感謝状

大宮町は明治二十二年（一八八九）の市制町村制により、江戸時代の

宮村の範囲がそのまま大宮町となつて誕生し、初代町長には宮田重徳が就任しました。歴代町長のうち、二代目町長松井端だけが宮にゆかりのない人物でした。

◇生いたち

松井端は安政六年（一八五九）、水戸藩士皆川氏の次男として生まれました。十二歳の時、同じく水戸藩士の松井家に養子に入り、家督を継ぎます。養家の初代、松井長衛門は美濃（岐阜県）出身で、初代藩主頼房に仕え、以来、端の養父まで七代にわたり鷹師、土蔵番、奥方番などを務める家柄でした。そして端が九歳の時に明治維新を迎えます。その後、端は明治二十五年ごろまで水戸裁判所に勤務しました。三十歳の明治二十二年（一八八九）には同じく旧水戸藩士の坂場家の四女りうと結婚。江戸時代の松井家は、現在の水戸市南町二丁目付近にあったようですが、端とその家族がこの家に住んでいたかは不明です。

晩年の端は、昭和五年（一九三〇）、水戸市新莊に自宅を建設し、趣味の漢詩作りに没頭する自適な生活を送りました。旧水戸藩の武家屋敷の一面にあたる楓小路の自宅に様々な庭木を茂らせて余生を送り、昭和十四年に八十歳の生涯を全うしました。この自宅は東日本大震災により被災し、昨年十月に解体されています。



▲居間で作詩する端



▲水戸市新莊の居宅前にて

◇大宮町長となる

端は明治二十六年（一八九三）九月十六日から二十八年三月十七日まで大宮町長を務めました。友人が端に宛てた書状に、裁判所吏員を辞職して大宮町長になったことへの賛辞が述べられています。一説には、当初諸富野村の村長になる予定だったのが、なんらかの理由で大宮町長になったともいわれています。二年で町長を辞職することになつ

た理由なども含めて大宮町長時代のことには残念ながらよくわかっていません。

◇台湾総監督府の職員となる

そして退職の同年、その年に設置された台湾総監督府の職員募集に応じ、赴任するのです。

台湾総監督府は日清戦争の戦利品として、清国から割譲した台湾を統治するために設置された日本の出先官庁です。端は、台湾総監督府が設置された明治二十八年から帰国する昭和二年まで、三十二年を台湾で過ごしました。その間、台湾総監督は初代樺山資紀、二代桂太郎、三代乃木希典と十二人の変遷を経ています。端は台湾をこよなく愛し、仕事の傍ら友人と漢詩を読み、台湾の文壇にも名を知られるようになっていくのです。

次号では、資料館に寄贈された端の遺品についてご紹介します。

※松井暢夫『松井端はどんな人』（私家版）二〇一一 を参考にしました。松井端氏の遺品はすべて歴史民俗資料館に所蔵されています。松井暢夫「友人との交流の中で読んだ漢詩」は『大宮郷土研究』第十六号に掲載される予定です。

歴史民俗資料館
☎52-1450